# 第６回 教職協働・職員協働イノベーション研究結果報告書

1　研究テーマ

「福祉専門職を目指す学生と地域住民の連携による新たな協働型学習プログラムの開発」

2　代表者

（所属・職名）：　社会福祉専門学校・専任教員

（氏　　名）：　三浦虎彦

3　共同研究員（順不同）

| 氏　名 | 所属 | 職名 |
|---|---|---|
| 岩崎雅美 | 社会福祉専門学校 | 校長補佐 |
| 山本由紀 | 社会福祉専門学校 | 精神保健福祉士通信課程長 |
| 五十嵐淳子 | 社会福祉専門学校 | 専任教員 |
| 岡知史 | 総合人間科学部社会福祉学科 | 教授 |
| 高山恵理子 | 総合人間科学部社会福祉学科 | 准教授 |
| 向山久美 | 男女共同参画推進室 | 研究支援員 |
| 柳下眞毅 | 総務局ソフィア連携室 | 職員 |
| 萱間隆夫 | 学術情報局研究推進センター | 職員 |
| 坂西博史 | 社会福祉専門学校事務センター | 職員 |

※本研究における研究協力者は以下の通りである。

榎本哲 TSUMUGU”BITO”project　代表

勝野有美 TSUMUGU”BITO”Project 事務局（埼玉医科大学非常勤講師）

織田鉄也 さがみはら若者サポートステーション（社会福祉専門学校卒業生）

宇佐美寛 児童養護施設石神井学園　（社会福祉専門学校卒業生）

板倉康広 NPO 法人ジャパンマック

高橋陽介 ASW 協会事務局

中川孝之 人事局人材開発グループ

4 研究目的

福祉専門職を目指す学生が、福祉ニーズをもつ当事者の視点や支援を行う福祉実践者の視点をより具体的に理解するため、以下の（１）～（３）の内容を通して新たな教育プログラムを開発する。

（１）社会福祉を学ぶ学生が地域住民の展開する福祉活動等に参加する機会を確保するため、地域住民や社会福祉協議会、職能団体等と調整を行い、希望する学生への周知から参加へとつなげる。

（２）学生が一定期間の地域活動に参加した後、四谷キャンパスにて、協力団体を中心とした地域住民と共に学習成果の報告と共有、相互交流を深めるためのイベントを開催する。

（３）上記（１）及び（２）を体験した学生から、どのような学びにつながったかに関するインタビューと内容分析を行い、今後、学部学科を超えて福祉を学ぶ学生に資する選択科目（高度教養教育プログラム）として単位化する可能性を検討する。

5 研究方法

上記のうち、（１）協力団体への依頼と調整は、2016 年２月～2016 年 4 月にかけて研究協力者による協力を得て行った。５月上旬に学生への説明会を実施し、教員を中心として学生と協力団体との活動調整を具体化した。企画自体の名称は「上智レンコンプロジェクト」（連携の「レン」と交流 companionship の「コン」から考案）とした。この期間に学内と並行し、学外に向けて SNS 等を通じた広報活動を図った。

学生による地域住民の活動等への参加は、5 中旬～9 月の期間に設定し、それぞれの協力団体の受け入れ日程に合わせて学生が選択する形で実施した。

（２）の交流イベントは 10 月 1 日に四谷キャンパス 12 号館にて行った。学生にはイベントの告知を行うとともに、には、学外協力団体を中心として、セミナー等の実施者としての参加や一般参加を呼びかけた。

（３）の学生へのインタビューと内容分析は、イベント終了後の 10 月中に行った。インタビューの対象となった学生は、「上智レンコンプロジェクト」の中でも継続的に参加した学生を中心にインフォーマルインタビューの形で実施した。また、これを補足する意味で、協力団体メンバーからのヒアリングと研究グループメンバーの専門学校教員による実施後の意見交換を行い、その結果を整理して最終的な考察を得た。

6　研究結果（実施状況）

（１）「上智レンコンプログラム」の概要

2016 年５月～９月の期間において、福祉専門職を目指す学生を受け入れることにご協力をいただいた団体は全体で 22 団体となった。それぞれの団体の概要、学生が参加できる活動内容、参加人数等を表１に示す。

表１　「上智レンコンプロジェクト」協力団体と活動内容

| | 団体名 | 団体の概要 | 学生が参加できる活動 | 参加人数 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | TSUMUGU“BITO” | 制度・政策・支援の網からこぼれる医療・福祉・教育の問題を独自の文脈で「日常生活」のなかに捉え直したうえで、解決に向けてアイディアや方法を開発・実践している当事者や、多分野多業種の人々を「つむぐ」プロジェクト。 | ５月～９月で毎月開催される定例会（8月は休み） | ５月：６名<br>６月：４名<br>７月：５名<br>９月：５名 |
| 2 | ケアラーズカフェアラジン（杉並区） | 介護に関する情報や、介護にたずわる人のケアをミッションに活動している。 | カフェに来た人たちと一緒に参加、カフェの手伝いをする。 | ７月：１名<br>９月：２名 |
| 3 | せたカフェ | 世田谷区を中心に、地域の「ケア「と「福祉」をキーワードにつながる住民を交えた多職種連携ネットワーク | 《もちよりカフェ》参加　介護職・ボランティア活動団体等の話がたくさん聞け、その方々の活動参加も可能。 | ４名 |
| 4 | 認知症介護者のおしゃべり会 | 介護家族の語り場。家庭内・親族内だからこその悩みを語れる場。制度や介護方法も教え合う事もある。 | 開催日に参加。居るだけでも大丈夫。ただし参加者が少ないので、主宰者との語りになる場合もある。 | 参加者なし |
| 5 | 千代田区社会福祉協議会 | 千代田区内の地域福祉活動の推進 | 「一番町はあとサロン」における高齢者への対応（傾聴、プログラムの企画・準備・運営、職員サポート等）<br>※一番町はあとサロンは、高齢者の孤立化防止等を目的に高齢者が気軽に立ち寄り、生活に関する困りごとを相談したり、地域の方やボランティア等が企画、運営するプログラムに参加することで、介護予防、生きがいづくり、仲間づくりをする。社協の職員が常駐。 | 参加者なし |
| | | | ふたばサービス 20 周年記念イベント「新田恵利さん講演「介護は突然やってくる」の聴講 | ５名 |
| 6 | 大田区コミュニティカフェ「遊とびあ」 | 団塊の世代をはじめ元気な高齢者が、地域で生きがいを持って活動できる場を創設し、地域住民が主体となって、それぞれの持てる力を発揮し合い、”いつまでも元気で助け合っていかれる地域づくり”を目指す。 | コミュニティカフェの各回の活動に学生が参加（スケジュールは問い合わせ） | ３名 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7 | 板橋区社会福祉協議会「福祉の森サロン」登録団体「やよい会」 | いつまでも元気にいきいきと暮らすために、″誰もが気軽に立ち寄れる集いの場″として健康体操等の活動を行っている。 | 高齢者の健康体操への参加 | １名 |
| 8 | 在宅ケア協会 | 病気や障がいにかかわらず、一人一人の「本当はこうしたい」をきくこと、一人一人の意志にもとづく社会生活を取り戻すこと、そういう社会生活を支援する活動を行う。 | 学生交流会への参加<br>当事者活動への同行<br>現場支援への参加 | ２名 |
| 9 | 東京ソーシャルワーカー協会 | 職種や所属を超えてソーシャルワーク実践に関する学びを深める。(学生や地域住民も参加可能) | 月１回の研修会への参加 | ５月：３名<br>６月：３名<br>７月：５名<br>９月：３名 |
| 10 | 日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会関東支部（ASW） | アルコール関連問題に関わる医療及び福祉にたずさわる専門ソーシャルワーカーの相互交流を通して専門性の向上をはかる。 | 関東支部の一部の研修会（アディクションアプローチへの参加：ワークショップあり）と、一部の研修企画ワークグループへの参加 | 30 名 |
| 11 | 地域とつながる子育て支援プロジェクト | 上智社会福祉専門学校（保育士科学生）が主体となって行う子育て支援企画 | 学生が地域の未就学児と保護者をお迎えし、楽しんでもらえる支援を行う。 | ５月：保育士科学生 15 名<br>７月：保育士科学生 15 名＋他校学生９名<br>10 月：保育士科学生 15 名＋他校学生 43 名 |
| 12 | ブルペンプロジェクト（社会福祉専門学校社会福祉士児童指導員科卒業生） | 在校生が卒業生の職場を訪問する。 | 数名の有志の卒業生の職場との個別調整 | 若者サポステ４名、特養　７名、病院 MSW６名、児童養護 A ５名、児童養護 B ６名<br>合計　２８名 |
| 13 | BTRD（港区生涯学習センター内） | 東京都港区に本拠をもつ非営利団体。<br>いすに座って踊れる「福祉レクダンス」<br>みんなでおどる「レクダンス」歌って踊る「ミュージックダンス」のほか「音楽プログラム」「体操」「ダンスセラピー」などの分野で | 横浜市新山下ケアプラザに「いすに座ってリズム体操」への参加 | ６月～９月（月１回：通しで参加）　１名 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 普及に努めている。 | | |
| 14 | 日本社会福祉士会 | 生活困窮者自立支援事業に関するソーシャルワーク研究会 | 研究会当日の聴講 | 15名 |
| 15 | よこはま保育のつどい | 子育てについて、保育士、保護者、保育学生など子どもたちに関わる人たちが集まって一緒に考えていく。 | オープニング、各分科会（おもちゃ作り、絵本のワークショップ、ベビーマッサージ）、講演（絵本作家の長谷川義史さん） | １名 |
| 16 | 杉並・ワーカーズ　まちの縁がわ　なかまの家 | 誰もが出入り自由の居場所。人と人との交流の場。 | キッチン開催日に学生がお手伝いとして参加する | ２名 |
| 17 | 株式会社オプテック | 歯科治療における電子カルテシステム、レセプトオンライン化に関する研究開発 | 地域包括ケアシステムにおける医療情報の共有について（会社訪問による学習） | ２名 |
| 18 | ジロール麹町きのこカフェ | ジロール麹町１階の地域交流スペースで介護スタッフが行うカフェ | カフェの時間帯（14時～16時）に学生がお手伝いしたり他の利用者と歓談したりして過ごす。 | ４名 |
| 19 | 世田谷生涯大学OB″will-be″ | 世田谷生涯大学で福祉を学んだOBの方々からなる音楽系サークル | 学生のサークルとの世代間交流 | 15名 |
| 20 | NPO法人介護者サポートネットワークアラジン「実践ボランティア養成講座」 | 上記「２」と同様 | 認知症の人や家族が孤立しないまちづくり、食卓（だんらん）を地域や家庭にとどける講座を開催。５回連続講座の１回でも参加可能。 | ６名 |
| 21 | 定形外かぞく（家族のダイバーシティ） | 「ふつうの家族像」に縛られないで、いろんな形の家族、生活の形が認められる社会を目指す。 | 不定期の研修会 | ４名 |
| 22 | 特定非営利活動法人 Ｄカフェまちづくりネットワーク（略称 Ｄカフェnet） | Ｄカフェ（認知症カフェ）の運営、イベント「めぐろ認知症ぷらすミーティング」のプロデュース、情報誌「でぃめんしあ」の編集等。 | カフェ及びイベントの日程ごとに学生が参加 | ２名 |

これら協力団体の内訳を大まかに整理すると、地域住民が中心となって行っている活動（当該団体がNPO法人格を持っている場合も含む）が12団体と全体のほぼ半数を占める。福祉専門職による職能団体や社会福祉法人等の福祉サービス実践団体は5団体、自治体や市町村社会福祉協議会が主

体となって活動している団体が２団体、卒業生の企画（ブルペンプロジェクト）と福祉関連の業務内容を持つ株式会社がそれぞれ１団体ずつという構成となった（１団体は２種類の別な活動で協力している）。

学生が参加できる活動内容はそれぞれの団体によって異なるが、住民主体のコミュニティカフェ等の活動は、開催日が曜日で決まっており、実際の活動日は希望する学生の予定に合わせて設定した。福祉専門職の職能団体による活動は、現職の実践者が集まる研修会の形をとり、上智大学四谷キャンパス内に教室を確保して、それぞれ希望する学生が参加した。

「地域とつながる子育て支援プロジェクト」は、千代田区と社会福祉専門学校による共同開催であり、専門学校保育士科の学生が活動のメインとなって期間中に３回実施された連続企画である。参加した学生メンバーがほぼ固定メンバーであった点と、支援の受け手が区内の子育て中の保護者や未就学児という形態をとっていたことが特徴的である。活動が継続的という点では、「BTRD」の活動も月に一回開催された継続企画であり、毎回、地域の高齢者とともに椅子に座ってリズム体操を行う活動で、参加する学生も毎回継続的してかかわる形となった（図１参照）。

協力団体の中で、卒業生が現役学生とのかかわりを組織した活動が「ブルペンプロジェクト」である。それぞれの卒業生の職場は異なるが、専門学校社会福祉児童指導員科の卒業生という共通項によって企画調整され、希望する学生がその職場を訪問していく形態となった。

図１　「上智レンコンプロジェクト」の実際（”BTRD”による「椅子に座ってリズム体操」の場面）

（２）「上智レンコンミーティング」の実施状況

2016 年 10 月１日（土）に、同年５月～９月に実施された「上智レンコンプロジェクト」の総括として、四谷キャンパスで交流イベントを実施した。主催は本研究申請グループであり、千代田区の後援を受けて開催された。参加者の状況は表２に示した。参加者の構成は、学校関係者と協力団体の人々がほぼ半数程度となった。また、本学の関係者以外にも他校の学生が多数参加した点が特徴的であるが、他校からの参加については、上記「地域とつながる子育て支援プロジェクト」に参加した学生（他の保育士養成施設等）が、イベント当日にも参加したケースが多かったことによる。

表２　「上智レンコンミーティング」参加状況

| 所属 | 人数 |
|---|---|
| 社会福祉専門学校学生 | 44 名 |
| 学部学生 | ９名 |
| 他校学生 | 42 名 |
| 卒業生（専門学校、学部含む） | 19 名 |
| 地域協力団体関係者 | 95 名 |
| 教職員 | 10 名 |
| 合計 | 216 名 |

表３　「上智レンコンミーティング」フロア構成（四谷キャンパス 12 号館）

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">502 教室</td></tr>
<tr><td colspan="2">◆14:00〜15：30<br>上智社会福祉専門学校ソフィア会講演会<br>八代ナザレ園園長・上智社会福祉専門学校第一期生　富田美智子氏<br>「「八代ナザレ園創立 116 年の歴史と今日的な新たな児童福祉の在り方」</td></tr>
<tr><td>401 教室</td><td colspan="2">402 教室</td></tr>
<tr><td>◆10:30〜13：30<br>「定形外家族」ワークショップ<br>◆14：00〜16：30<br>TSUMUG″BITO″「は・た・ら・く」ことの意味を考えるシンポジウム」</td><td colspan="2">◆13：00〜15:30<br>介護者サポートネットワーク アラジン<br>「ケアラー大集合！介護者の声が地域を変える」<br>〜私たちはこんな地域サービスがほしい！〜</td></tr>
<tr><td>301 教室</td><td colspan="2">302 教室</td></tr>
<tr><td>〈しゃべり場スペース〉（机可動式）<br>◆13:30〜15:30「定形外家族」</td><td colspan="2">◆10：30〜12：00<br>上智社会福祉専門学校保育士科学生による子育て支援（千代田区共催）<br>「地域とつながる子育て支援プロジェクト」</td></tr>
<tr><td>201 教室</td><td>202 教室</td><td>203 教室</td></tr>
<tr><td>◆託児室<br>（ベビーカー置き場、授乳室兼用）<br>※託児スタッフが常駐。</td><td>◆12:00〜13：30<br>「せたカフェ」<br>「点」から始まるケアのまちづくり<br>〜人をつなぎ拠点をつなぐ「せたカフェ」の実践、その次を皆で語ろう〜</td><td>＜しゃべり場スペース＞（机固定式）<br>※時間予約制</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">102 教室</td></tr>
<tr><td colspan="2">◆10：00〜16：00<br>「レンコンステージ/学生・住民の交流フロア」<br>※一日を通してレンコンプロジェクトの紹介や交流企画を実施。</td></tr>
</table>

イベントの開催場所は四谷キャンパス 12 号館を使用した。表３に示したように、12 号館全体を使ってのイベントとし、1 階 102 教室をイベント全体の交流フロアとして位置付けた。102 教室内では、協力団体の有志と学生との協働作業によってコーヒーや軽食を提供することとし、参加者はそれらを利用して歓談し、異なる地域や所属団体で活動する人同士が相互に知り合い、さらにネットワークが拡大していくことを企図した。「レンコンステージ」は、当日に参加可能な協力団体の方々を中心に教室教卓部分をステージとして、図２に示したようなスケジュールで報告等が行われた。

## レンコンステージ(102教室)に登場する皆さん

10:00オープニング
司会:柴山延子さん
上智社会福祉専門学校　高山貞美校長
10:30　NPO法人在宅ケア協会　外山誠さん
社専ソフィア会　三浦和行会長
11:00　上智社会福祉専門学校卒業生”ブルペンプロジェクト”の皆さん
11:30　Dカフェまちづくりネットワーク　竹内弘道さん

12:00　ハロウィンコーナー(子育て支援活動参加のみなさん)

12:30　東京ソーシャルワーカー協会　根本博司さん
きまぐれ八百屋だんだん　近藤博子さん
コミュニティカフェ　遊とぴあ　木村恵子さん
13:00　上智社会福祉専門学校　卒業生サークル”wa-sophia”の皆さん

13:30　上智社会福祉専門学校保育士科の皆さん
(世代間地域交流プログラム)
上智大学短期大学部　木戸直美先生
世田谷生涯大学OBサークル”will-be”の皆さん
板橋区福祉の森サロン”やよい会”の皆さん

14:30　千代田区社会福祉協議　片倉裕司さん
ケアラーズカフェアラジン　森川恵子さん
15:00 BTRD 浦江千幸さん
ジロール麹町(きのこカフェ)鈴木裕太さん
上智社会福祉専門学校介護福祉士科コラボ合唱団
上智大学　鈴木伸国先生

※空いている時間はオープンマイク形式で交流していきますので、セミナーやワークショップ、講演等が終わった方々、是非共 102 教室でメッセージをどうぞ！

図２　「レンコンステージ」のタイムスケジュール（当日パンフレットより抜粋）

図３　「レンコンステージ」のオープニング場面（社会福祉専門学校長による挨拶）

図４　協力団体による「レンコンプロジェクトの活動報告」（東京ソーシャルワーカー協会）

図５　レンコンステージでの協力団体によるパフォーマンス（音楽サークル”Will Be”の演奏）

１階と５階を除く各教室では、協力団体の中でも当日のセミナーやワークショップを希望する人たちが教室単位で企画し、テーマを絞った学習を行った。参加者は、１階教室を拠点としながら、これらのセミナーやワークショップに参加することとなった。

7 考察と今後の展開

（1）「協働型学習プログラム」としての意義

今回、「上智レンコンプロジェクト」内の企画に参加した学生へのインタビューから、主として以下の４点を、本研究のテーマである協働型学習プログラムとしての意義に関連する要素として改めて整理した。

①地域活動の「敷居の低さ」を感じる

住民主体のコミュニティカフェに関連する活動体験からは、通常の社会福祉行政の枠の中でのサービス機関等から得られる感触との「違い」が指摘された。「敷居が低い」とは、認知症をもつ家族を介護する介護者等の「当事者」に対する対等な立場から接するスタンスのことを意味しており、福祉専門職の実習等とは異なった視点を得られることにつながっている。福祉専門職を目指す学生が、地域の活動の中に存在する良い意味での「敷居の低さ」を体感することで、その後、地域を舞台として実践を展開していくために必要な視点へとつながる。

②家族とのかかわりの重要性を理解できる

これは「地域とつながる子育て支援」に参加した学生の感想からの引用である。対象となる活動は子育て中の保護者を招いて一緒に過ごす企画であるが、その体験を継続する中で、改めて出てきた家族とのかかわりの重要性についての率直な認識であると考えられる。通常の保育士養成カリキュラムにおける保育実習等で中心となるのは子供とのかかわりだが、実際に地域で保育実践を行う上で、子供との関係と同等に重要となるのは保護者との関係であり、参加した学生の感想に反映されている。福祉専門職として地域で実践する上で「子育て支援体験」は、その後の視野を広げるために有効な学びである。

③活動を重ねることでわかってくることがある

今回の協力団体による企画は、一回の参加でも可能であるものが多かった。その中でも、高齢者のリズム体操に参加した学生は、前半にはわからなかった学びがその後後半に入ってわかってきたという。回を重ねるごとに高齢者のメンバーとのやりとりも深まっていき、個々のメンバーの細かい状況や思いなどが把握できてくること、グループ内に活動内容に深くかかわるような「キーパーソン」が存在することなども理解できてきたという。他の活動においても参考になる点だが、活動をある程度継続して行うかは、得られる学びの質にも影響することがわかる。

④「パーソナルな視点」を感じられる

これは上記協力団体の「ブルペンプロジェクト」に参加した学生の感想から得たものである。「ブルペンプロジェクト」は、専門学校卒業生が現役学生に向けて、自身の職場訪問をコーディネイト

する趣旨であるが、その受け入れスタンスは、一般的な職場紹介とは異なり、紹介者の個人的な感触を含めて「卒業生つながり」という私的なルートを通じてメッセージが伝わる。その結果、通常のカリキュラムではカットされがちな内容も含まれてくるため、参加した学生は、普段の授業では言葉にされないような福祉実践者の個人的な感覚を体験することとなる。このような種類の学びは、紹介者による職場紹介のバイアスが生じることもあり、それをリスクと捉えると通常のカリキュラムからは排除されやすい。今回のように卒業生とのパイプを通じた、意図的・選択的な企画であってこそ得られるものと考えられる。

（２）教員による意見交換から

上記を補足する意味で、「上智レンコンミーティング」終了後に行った専門学校教員による振り返りの意見交換を行った。本研究の成果や課題を含めて、以下のポイントがあげられた。

①職能団体とのコラボレーションの意義

本研究は、地域住民との協働を念頭においてスタートしたが、「地域住民」の定義は広く、場合によっては専門職も含まれる。そこで今回、あえて福祉系職能団体の協力を得て学生との合同研修を組み込んだが、結果として、現役の学生は卒後の実践を想定して具体的な学びを得ることができた。一方で、専門職の側も学生の視点や質問を通して自らの実践を振り返り、専門性の土台を改めて確認することにつながったと言える。「協働型学習」の一つの形として、その有効性が認められると考えられる。

②学生サークルと地域住民サークルの相互交流

今回の協力団体の中で、生涯学習音楽サークル”Will Be”は、専門学校学生サークルとの合同活動という形で四谷キャンパスで行われた。この企画自体は世代間交流を意図した単発のものだったが、その後の交流から関係が深まり、10 月の子育て支援活動においても高齢者サークルのメンバーの協力が得られ、学生のみならず地域の子供達と高齢者の三者の交流が副次的に生まれることとなった。このような展開は、「協働型学習プログラム」の可能性を感じさせる要素である。地域住民やテーマを決めて活動しているグループの中にはフットワークもあり、活動意欲も高い人々が多い。学生の活動や興味関心と重なる部分や、学びや楽しみを共有できる部分が潜在的には多くあると推測できる。こうした学校を取り巻く人々と学生との関係性を「つなげて育てていく」アプローチが有効である。

③全体交流イベント（上智レンコンミーティング）の位置付けに関する課題

本研究の主軸となるのは５月～９月の時期に実施した学内外における学生の活動である。それを総括する意味で、また外部に向けてアピールする意味で、全体交流イベントを最後に行う形をとった。しかしながら、それぞれの目的自体は異なっている。そこで全体交流会は、参加した協力団体同士、学生と協力団体が新たにネットワークを広げ、それぞれの意識を共有できるよう、その目的に絞って企画していく必要がある。今回、セミナー等を全体交流会に同時に組みこんだ結果、参加

者が時間によってフロア移動し、参加者の交流が分断される傾向もみられた。今後もこの方式を採用するならば、全体交流イベントの趣旨を明確にして、交流が促進される実施方法を検討する必要がある。

（３）今後のカリキュラム化におけるイメージ

本研究に関する以上の考察を踏まえ、今後、選択科目として提案する場合、以下のようなコースが考えられる。

①地域住民や当時者の立場を基本的に理解するためのコース

コミュニティカフェや介護予防のための住民主体の活動等、地域住民が主体となって展開している活動に学生が参加し、福祉専門職が地域住民の立場を理解するためのコース。一つのカフェや拠点に継続的に参加していく形態と、異なる地域や活動を巡っていく形態の両方の可能性が考えられる。また、このコースでは、在学中から地域ネットワークとの関係をつくるという発想で、そのきっかけづくりからその後の関係の深まりを支援することも視野に入れる。

②福祉専門職養成カリキュラム（特に実習）の効果を高めるコース

通常のカリキュラムにおける実習科目の前後で選択し、実習の効果を高めることが期待されるコース（今回の「ブルペンプロジェクト」を想定）。実習を通じて福祉サービス専門機関や施設/事業所を理解する上で、その分野で実践する卒業生からのアドバイスによって、学生が自身の視野を広げたり、福祉職場を多様な角度から考える機会を提供できる。また、個々の学生が卒後の進路を検討する上でも有効なコースとなり得る。

③福祉専門職養成カリキュラムに不足しがちな内容を提供するコース

継続して実施する子育て支援プログラム等により、通常の実習では体験しにくい保護者との関係を含めて、多様な視点から子育て支援を体験できるコース。今回の「地域とつながる子育て支援」の企画をベースとした内容や実施方法が考えられる。実施にあたっては定期的な実施、適切な会場の確保、対象となる地域との協力関係等が必要となる。また、家族との関係を体験することが福祉専門職養成カリキュラムにおいて難しいという点では、高齢者介護等においても共通の事情はある。介護福祉士養成カリキュラムに不足している要素についてもあらためて検討し、選択できるコースとして実現するための条件を検討する必要がある。

④学生の学びと専門職の学びをつなげていくコース

社会福祉の職能団体（社会福祉士会、ソーシャルワーカー協会等）が行う研修のうち、学生が参加することで双方の学びが高まることが想定されるものを科目として編成する。いくつかの研修を組み合わせて、学生が卒後の自身の実践を考える上で学びを活かしていく形と、ある程度卒後の進路や決まった分野での実践を想定して、一つの職能団体の研修に継続参加していく形の双方が可能である。

以上